

バギオに暮らす日本人“七夕”と 現地女性ファサン。 2人の愛の行方は…

A Japanese “Tanabata” living in Baguio and a local woman Fas-ang.
Where does the love of two men and women go? ...

日系人作家の短編を完全翻訳。一挙掲載。 読む前に観るか?、観る前に読むか?

Fully translated Japanese Filipino writer's short stories. All posted here.
Do you watch before reading? or Do you read before watching?

あなた次第です。

It's up to you!

劇場公開: 2019年6月22日(土)、23日(日)
劇場: TIU まにら新聞劇場
※詳細は裏表紙の広告ページ参照
Saturday, June 22 - Sunday, 23, 2019
TIU Theater / Manila Shimbun
※ For details, see on back cover page.

七夕の妻

(I)

ファサンは初めてバギオを訪れた。山岳列車に揺られ続け、疲れ切った彼女の姿がトリニダード溪谷の真上にあった。そこから、彼女はバギオの街を見下ろしていた。

バギオが彼女の目的地である。彼女は同行した3人の女たちと一緒に道路工事の現場で働く予定だった。原住民の女たちには鎌が与えられ、山腹の地面を削り、道路を作るための小道を切り開くのだ。

他の同行者たちは既に到着していた。ファサンは現場が決まるまでの期間、どこに住むのか知らされていなかった。彼女はたぶん飯場で他の労働者と彼らのくさい臭いとともに寝泊まりさせられるのだと思った。彼女は人に溢れた天井の低い建物や段ベッドなど多くのことを聞いていた。

昼下がりに。ポイントックから来た女4人と男3人の新しい移民たちは、トリニダード溪谷を歩いていた。彼女たちの人生でかつて見たこともないほど長くまっすぐに伸びた道だった。しばらく行くと丘越えの上り下りが続き、平坦な道に戻ると単調になり歩みが遅くなった。

彼女たちは、溪谷の背後に沿って、トリニダード川の狭い隙間を抜けルクバンへ入った。道に沿って目にする光景はどこまでも広がるキャベツ畑だった。ルクバン溪谷を通り過ぎ、行き着いたキサド溪谷もまたキャベツが列をなし連なっていた。

太陽は茶色に染まった西の丘に低く沈んでいた。男たちは今夜の宿泊について考えていた。なぜなら、飯場にた

どり着くためにはもうひとつ急な丘を越えなければならなかった。結局、歩き続けることが彼女たちに告げられた。彼女たちの足はひどく痛んでいた。

溪谷のわらぶき家の扉は彼女たちのためには開かれてはいないのか?

彼女たちは七夕の家の前にたどり着いた。日本人の農園主は彼女たちが通り過ぎようとするのを小さな窓越しに眺めていた。彼は彼女たちに呼びかけた。

「仕事を探しているのか?」農園主は片言の現地語で尋ねた。

「はい、私たちの仕事を…」ひとりが答えた。

七夕は「もしよければ、私の農園で女2人分の仕事がある」と、告げた。

男たちはいぶかし気に七夕と女たちを見比べた。「ここに留まりたい奴はいるか?」ひとりの男が聞いた。七夕は「はい、私たちの仕事を…」ひとりが答えた。

ファサンだけが農園主の申し出を受けてもいいと思っていた。彼女は前に歩み出た。

「あなたは私にいくらくれますか?」

「10ペソだ」

「10ペソ?」ファサンは12ペソを求めようとしたが、七夕は取り合わないだろうと思った。ファサンはしばし案じた後、彼女の仲間に「私がここに留まる」として、道路工事の給金とここの給金は2ペソ違う。でもことによったら私にはここのほうがましかもしれない」

ファサンは決意した後、3人の中のもうひとりにも、ここに留まるように説得した。七夕はその様子を微笑みながら眺めていた。

休憩していた一行はまだ道半ばだ。「さて、2人はここに留まる」年かさの男が言った。「お前たちがそれぞれにとって良いと思えるなら、きつとうまく

いく。私たちの心配は不要だ。私たちはこのまま進み今夜早くには飯場に到着する」。

こうして、ファサンはまず、七夕の使用人となった。彼女は女性として最も魅力的な年ごろを迎えていた。頬は少女時代よりもしっとり、艶を増していた。豊かな乳房は彼女の健康な体をさらに魅惑的に映し出していた。彼女が歩いた後の足跡さえ美しく思えた。誰もが彼女が本当に魅力的であることを認めていた。

(II)

七夕には妻がいなかった。彼は今まで長い間、彼との結婚を望む原住民女性を探していた。しかし出会うことはなかった。ファサンが運命に導かれて訪れるまでは…。彼はもう少しで日本から嫁を娶るところだった。彼はその女性の写真を持っていた。しかし、それは彼にとって大金を要することだった。

ファサンはやがて七夕に好意を抱き彼との結婚を望むようになるのだろうか?

ある夜、切なくファサンに思いを巡らしていた七夕の心の中に確かな覚悟が生まれた。ファサンは家の前の水路で足を洗っていた。時折彼女は膝までスカートをもち上げて見せた。七夕は輝く素肌を見せつけられ、魅了された。

ファサンも七夕を強く意識し始めていた。彼らが夕食を前に低い丸テーブルを挟んで座ったとき、彼女はひそかに彼を伺っていた。彼はあごひげを蓄えていた。彼は時々、3日間ひげを伸ばした。その毛深い様子は醜く思えた。ただ、彼の整った顔立ちと青いシャツは結局ファサンを魅了していた。

身支度を整えた七夕は日曜の市場へ出かけて行った。彼の使用人が2つの大きな籠を肩に担いで彼の後に続いた。籠はイチゴ、セロリ、トマト、ほうれん草、大根、そしてドライフラワーなど農園の作物であふれていた。ファサンも晴れやかな外出着を着こみ、後を追った。ファサンは市場で農園の作物を売るようになっていた。

午後、市は終了した。ファサンは店を閉め重い手提げを持って家へ向かった。彼女が家に到着したとき、七夕はテーブルの上に転がった半分空っぽのジンで酔っ払っていた。

ファサンはお金の入ったバッグを彼の交差したひざ元に置いた。「これが野菜の売り上げです」と、彼女は告げた。

「お疲れさま」。七夕は幸せそうな笑顔を浮かべた。彼は「ありがとう」と彼女に声をかけ、ファサンに全幅の信頼を示した。彼は1/2ペソコインを2つを取り出すとそれを彼女に渡した。「さあ、受け取れ。これはお前のものだ。お前が欲しいものを何でも買っていいぞ」彼は愉快そうに笑った。

彼は聡明で寛大な農園主だった。

平日は仕事に忙しく、勤勉な日々が続いた。もうひとりの原住民女性は自分がファサンほど気に入られていないと気づいたときに去っていった。ファサンは家事が終わると、キャベツ畑で葉についた虫を取っていた。七夕はいつも小屋で苗を世話することに熱中していた。土の息吹を感じ取る繊細な指を持つ彼はほとんどの育苗作業をひとりで行っていた。彼は3つの農園分の苗を手掛けていた。

「おはよう! 新しい朝!」ファサンは繰り返される毎日を楽しんでいた。彼女は少しずつ家事を覚えた。早朝、彼女

は調理のために目覚める。昼、彼女は再び調理する。そして夕方同様に。彼女はその合間合間に洗濯をし、不規則に届けられる洗濯物もさらに洗う。彼女は家を掃除しながらも、火鉢で沸いている茶釜に気を配ることを忘れない。七夕はいつ帰ってきてても一服のお茶を味わうことができた。

(Ⅲ)

太陽が熱く照り付け葉も萎えてしまう平日の午後、七夕は散歩がてらに近所の岡本宅を訪ねることを好んだ。彼らは広島県という日本の同じ地方の出身だった。岡本はベンゲット出身の女性を妻にしていた。川根はマメで人懐こい友人だった。岡本がファサンに唯一見出した過ちは彼女の無知だった。彼女は小さな溪谷の向こうを何も知らなかった。

ある日の午後、七夕はいつものように友人を訪ねた。それは重要な話だった。ファサンが彼女にとって良い妻になれると思うか？七夕は岡本に彼の気持ちを伝えた。七夕はゆっくりと話を切り出したが、岡本は直接的だった。

「あの女と結婚しようと思う」と、七夕が言った。

「どの女だい？ ファサンか？」岡本が聞き返す。

「そうだ」

「彼女は良い女だ。彼女はてきぱきと立ち振る舞う」

「私はほんの短い間だが彼女を見てきた。彼女はこれからも正しく振る舞えると思うかい？」七夕は真剣に尋ねた。

岡本は躊躇し、はっきりとは答えなかったが「私の妻を見てくれ。私たちは平和に暮らしている」と言った。

「あなたは私の親友だ」岡本が続けた。七夕は友人を見た。「あなたの妻はベンゲット族でファサンはポントック族だ」

「それでも彼女たちは親友だ。私たちと同じぐらいに」岡本の明快な答えだった。彼らはともに笑った。

(Ⅳ)

2日後、七夕は決意した。彼はこれまで度々彼女をからかってきた。しかし今、彼はファサンにどう打ち明けるべきか真剣に悩んでいた。彼はこのおらかな原住民女性に強く魅せられていた。

七夕は普段ファサンが掃除をするとき以外はめったに足を踏み入れない大部屋に彼女を呼び出した。そこには薄暗い明かりが灯っていた。緊張した様子もなくファサンは入ってきた。彼女は既にこの時を予期していたようだ。

彼女は彼の向かいに背筋を正して座った。七夕は慎重にゆっくりと話した。七夕はファサンに思いの丈を誠を尽くして伝えた。そして、彼女はそれを受け入れた。式もなく、入籍もなく、暗黙の誓いを互いに交わし二人は結ばれたのだった。

ファサンは以前のように農園作業が難しいとは思わなくなっていた。ただ、それは時に退屈に感じられた。日々の作業に彼女は時々苛立ちを覚えた。それはほんの一時のことであつたが…

毎日、彼女は市場で販売するために作物の虫を取り、まっすぐに伸ばして束ねる作業を辛抱強く繰り返していた。彼女の手は繊細な作物の扱いに長けてきていた。

太陽の陽が溪谷いっぱいにそそぎ、露を纏った葉がキラキラと輝く中、庭をひらりと舞う白い蝶を眺めること

はとても楽しみだった。だが、彼らの幼虫は緑の野菜を容赦なく食い荒らす害虫だ。それでも、明るい朝の彼らの出現は使用人たちを和ませ、元気づけた。

やがて、ファサンは日本の慣習を覚えていった。七夕に従い箸の使い方を学び、小屋の外にある風呂場で夕方に湯を沸かし風呂に入った。ファサンは日本流に桶に塩を振り大根を漬けた。フィリピン製ではあるが木靴を履き始めた。そして、床に就く前には寝室の外にそれを置いた。彼女はお茶を飲むことにも慣れ、多くの料理に醤油を注いだ。布団も和式のものが彼女に合わせて作られた。

結婚して1年が過ぎ、彼らは男の子を授かった。赤ん坊はとても愛らしかった。

七夕は祝いの席を設けた。彼は日本人の友人を招待し洗礼の宴を行った。彼らは酒を酌み交わし日本の海藻や漬物、缶詰などをつまんだ。

しかしファサンはこの賑わいの中、彼らの会話を理解することができなかった。彼女は静かに赤ん坊を腕の中に抱きしめるだけだった。

宴の途中、ある男（その日女性の来客はなかった）が赤ん坊と母親に贈り物を届けにきた。ファサンはとても喜んだ。贈り物が彼女の前に積み重なる度、彼女は喜びを繰り返した。

男は日本の暦を調べた。赤ん坊は加齢と名付けられ、客たちは酒を満たしたグラスを天に掲げ、何度もバンザイと叫んだ。彼らは母と子のために祈った「幸せが訪れますように」と…

七夕は出産によって憔悴したファサンの体調回復を最も気にかけていた。彼は1か月間は屋内に留まらなければならないという日本の習慣を教え、その後には外出許可を与えた。

そして8月が過ぎたとき、ファサンは温かく自由な日差しの中へ歩み出た。頬の青白さは消えていた。彼女は活力と若さを取り戻していた。彼女にいつものような軽快な足取りが戻った。彼女は軽やかさ情熱と力強さに満ちていた。ところが…

(Ⅴ)

今日はどんな話し？ ファサンはポントックから戻った人たちの話をしきりに聞きたがった。もう、焼き畑にカモとトウモロコシと一緒に植えられたかしら？

ファサンの家族は彼女が子供を産むことを聞いていた。そして彼女の様子を心配し、従弟を送り出した。彼はファサンが幸せに暮らしているか？ ファサンの日本人夫は彼女を大切にしてくれているか？ それを確かめてくるように言われていた。

だが、それは間違いだった。彼らは七夕に苦難をもたらす存在だった。ポントックの人たちは感情的だ。

従弟がやってきた。七夕は従弟をもてなした。彼は少年のために短パンを買い与え禪をやめるように言った。少年はとても喜んだ。1週間後、少年は帰るといった。七夕はさらに少しの服を買い与えた。

ファサンは従弟を見送りに出た。七夕は小屋で苗の栽培を続けていた。ファサンは従弟に言い聞かせた。「お父さんとお母さんには私は幸せに暮らしていると伝えて。だから私のことは何も心配することはないと。主人は親切だし、私に欲しいものは何も無いわ。少しだけど、私が貯めたお金をお父さんに渡してちょうだい。そうよ、私に

は子供がいる。だから、私はここに住み続けるの。でも、いつかは家に帰ってお父さんやお母さんに会いたい。本当は時々ホームシックになるの…」

ファサンは泣いた。彼女の涙を見た従弟もまた泣いた。そして、彼らは分かれた。

(Ⅵ)

七夕が彼の妻を深く愛していたのは誰もが知るところだった。あらゆる機会に彼はその愛情を彼女に示した。かつて、彼は映画を見るために彼女が街に行くことを許さなかった。しかし、結婚後は特に気にすることもなく彼女を送り出した。ファサンはすぐに映画に夢中になった。彼女はひとりの使用人の少年と時々出かけるようになった。

彼女は赤ん坊を背負って連れていった。彼らは帰り道を照らす灯油ランプを持っていた。きっと彼らは真夜中近くに帰ってくるだろう。

七夕は一人家にいた。彼は日本の小説を読みながら遅くまで起きていた。ファサンが戻ったとき彼女は自分が見た映画について饒舌に語った。七夕は彼女の冷えた足を温めるために厚いブランケットで覆った。彼女はたやすく眠りに落ちた。そして彼も眠りについた。

ファサンはますます映画にのめり込んでいった。街は2kmも離れていたが、それは問題ではなかった。劇場は魅力的だった。さらに、ファサンはしばしば親戚や同郷の仲間と劇場で出会った。彼らもまた映画にはまっていた。彼らはともに楽しいひと時を過ごした。

七夕は岡本にファサンが映画に明け暮れていることについてどう思うか尋ねた。岡本は賛成を好まず保守的なためそれを良しとはしなかった。彼は彼女を止めるようにアドバイスした。しかし、七夕はそれを彼女にほめかすことすらできないほど、彼女に甘すぎた。高圧的に振る舞う時もあつたが彼女が望む楽しみを奪うには彼は彼女を愛しすぎているのだった。

ファサンは仕事が終わると連日映画に出かけた。七夕はより寛容になっていった。彼は彼女をとどめ置くために勇気を振り絞ることはできなかった。彼女を叱る機会はめっきり減った。彼女は劇場のプログラムのひとつの変更も見逃さなかった。七夕は彼女とどう向き合えばよいのか分からなくなっていた。彼は何が彼女を映画に引き付けているのか理解できなかった。彼にとって映画は、はるか昔に観た記憶だけで全く興味をそそられるものではなく、うんざりさせられただけだった。

しかし、ファサンは相変わらずひたすら出かけて行った。

(Ⅶ)

ある夜、彼女は帰宅しなかった。彼女は朝戻ってきた。七夕はどこで眠ったのか尋ねた。そして、彼女が答えた「従弟とカンボ・フィリピーノで…」。

彼女は体がだるく、農園へ行くことができないと言った。一日中、彼女は家にいた。七夕は農園へ出かけた。ファサンは自分の荷物をもとめた。彼女はそれらを束ね隅に隠した。彼女は子供に服を着させた。そして、真夜中、七夕の寝息を聞きながら彼女は逃げ出した。ファサンは彼女の恋人が待つ場所へ子供を抱えながら駆け下りていった。彼らは彼らの故郷ポントックへ戻るつもりだった。その

男はキャンプ・ジョン・ヘイの軍属から解任されていた。ファサンは立ち去る前にテーブルの上に手紙を残した。それは彼女を誘惑した男によって書かれたものだった。

「私たちを追いかけないでください。ポントックの家に帰ります。もしあなたが私たちを追えば、あなたは道中で殺されます」

七夕はその手紙を読んだときあえて遁走した恋人を追うことはしなかった。その内容は突飛すぎた。むろん、たとえ追って行っても七夕に死が訪れることなかっただろう。彼は悲しみに暮れていた。3日間、彼は食事をとることもできなかった。彼は裏切られ、捨てられたことに苦しみもがいた。救いのない中、彼は妻を誘惑し連れ去った男への憎しみを募らせていた。

岡本は友人宅を訪れ親身になって彼を慰めた。岡本は妻とともに、彼と一緒に暮らすことを提案した。しかし七夕は彼らの申し出に同意はしなかった。何事も彼の慰めにはならなかった。彼は友人に自分を一人にしてくれるよう丁重に頼んだ。七夕は悲観していた。彼は家の中に一日中座り込み大酒を爛った。彼は自分の殻に閉じこもった。農園は荒れ果てていった。

数か月が過ぎた。作付けされたキャベツは腐っていた。七夕は狂ったと思われる。彼は作物に何が起ころうとも気にしなかった。彼は残された使用人たちを解雇した。雑草はどの苗よりも大きくなっていった。雨季が始まり、畑は嵐によってさらに荒れ果てていった。七夕はわずかな蓄えで暮らしていた。

雨季が終わった。晴れ日よりだが寒さが厳しくなる11月が丘に訪れた。1ヶ月の後、七夕は日本に戻り死ぬつもりだった。彼の落胆は極まっていた。七夕は失った息子のことを思うと号泣せざるを得なかった。

(Ⅷ)

予期せぬある日、ファサンは七夕の農園にいた。ファサンとの恋愛を疎ましく思った恋人は彼女のもとを去っていった。彼女は農園に無残に散らばった作物の残骸を取り除いていた。

彼女は村の人から七夕の様子を聞いた。「あなたの日本人のご主人は自暴自棄になっている」と、何人かが告げた。「彼はあなたと息子のことを思い続けている」別の人が語った。「彼は海を越えて日本に帰ると言っていたが、彼はその前に幼い息子を探しに出るつもりだ」また別の誰かが告げた。ファサンは思った。「ああ、私は彼のもとへ行かなければ。手遅れになる前に…」

意を決し、彼女は七夕の家の前に立った。夕暮れどき、彼女は不安と期待に揺れる思いだった。彼女は七夕が演奏する竹笛が生み出す低く沈んだ音色を聞いた。あまりにも悲し気な音色だった。ファサンはその家の扉が今なお彼女のために開かれているのか不安だった。彼女は彼と暗く沈んだ闇を分かち合い打ち払うことができるのか？ ファサンは感情に流され失態を演じてしまった自分を恥じた。

音が止んだ。ファサンは彼女の手を握った子供が大声で泣き出したとき心臓が止まる思いがした。七夕は窓の外を見て驚いた。妻と息子の姿がそこにあった。彼は慌てて外へ飛び出した。彼は優しく手を取り、妻と息子をゆっくりと家の中へ招き入れた。

そして、天井からぶら下がりが使われずにいた大きなランプに火を灯した。

Tanabata's Wife

Sinai Hamada

FAS-ANG first came to Baguio through the Mountain Trail. When at last she emerged from her weary travel, she found herself just above the Trinidad Valley, where she overlooked the City of Baguio. Baguio was her destination. Along with three other women, she had planned to come to work on the numerous roads that were being built around the city. Native women were given spades to shovel the earth from the hillsides, and to make way for the roads that were being cut.

They had almost arrived. Yet, Fas-ang knew of no place where she could live in the city while also waiting to work as a laborer. Perhaps, she would stay in the worker's camp with the other laborers in their smelly quarters. She had heard a lot about tiered beds, the congestion in the long low-roofed house for the road workers.

It was mid-afternoon. The four women and three men, new immigrants from Bontoc, walk on the long straight road in Trinidad Valley. They had never seen before in their lives a road so long and straight. After the regular ups and downs journey over the hills, the level road was tedious to travel on.

Plodding along, they at last left the valley, passed through the narrow gap of the Trinidad River and entered Lukban Valley. Along the road, the sight was a string of cabbage plots, more and more. When they passed the Lukban Valley and arrived to Kisad Valley still, there were rows and rows of cabbage.

But, the sun was sinking low behind the brown hills in the west and the company thought of their shelter for the night. For they had one steeper hill to climb before the city laborer's camp. Their feet ached painfully. Was there no door open for them among the thatched homes in the valley?

It was then that they came to the house of Tanabata-san. The Japanese gardener, he was then looking out through his tiny window as they were about to pass on. He halted them.

"Are you looking for work?" the gardener called in his broken dialect.

"Indeed, we are, my lord," one of the strangers replied. "If you like, I have work for two women in my garden," Tanabata offered.

The men looked questioningly at the women. "Which of you would like to stay?"

One man asked.

Only Fas-ang was willing to consider the gardener's offer. She stepped forward.

"How much would you give me?" she asked.

"Ten pesos."

"Ten Pesos?" Fas-ang asked for twelve, but Tanabata would not agree to that. Fas-ang reflected for a moment, and then answered, "Guess I'll stay. There is but a difference of two pesos between what I'll get here and my wage if I become a road worker. Who knows? My lot here may even be better."

One of the remaining three women was also persuaded to stay after Fas-ang had made her decision. Tanabata was smiling as he watched the two make up their minds.

The rest of the company were going on their way. "So you two will stay," the eldest of the group said. "Well, if you think it is better for both of you, then it is alright. You need not to worry over us, for we shall go on and reach the camp early tonight."

In this way, Fas-ang first lent herself to Tanabata. She was at the height of her womanhood then. Her cheeks were ruddy, though not as rosy as in her girlhood. She had a buxom breast, her main charm. As she walked, her footsteps were heavy. She was indeed pretty that anyone would admit.

II
Tanabata had no wife. For a long time now, he had been looking for one among the native women, hoping he would find one and be married until, Fas-ang came by fate.

He had her picture. But it would have cost him much.

Would Fas-ang by chance learn to like him and later agree to a marriage? This was only a tiny thought in the mind of Tanabata as he sat one evening looking wistfully at Fas-ang. She was washing her feet by the water ditch in front of the house. Every now and then, she lifted her skirt above her knees. Tanabata saw her clear bright skin and tempting him.

After a time, Fas-ang herself would watch Tanabata as they sat before their supper, she casted furtive glances at him across the low circular table. He was bearded as sometimes he let his beard grow for three days, and his unshaven hairy face was ugly to look at. Only with a clean face, and well-

dressed on his blue suit did Fas-ang like him when Tanabata-san would walk on Sunday to the market fair, she was close behind followed by one of his laborers, as he was carrying two heavy baskets over his shoulder. The baskets were overflowed of harvested from the garden: such as strawberries, celery, tomatoes, spinach, radishes, and "everlasting" flowers. Fas-ang, in her Sunday dress would trail in the rear. She was to sell the products at the market.

In the afternoon, the fair would be over. Fas-ang went home with a heavy handbag. She usually arrived finding Tanabata drunk, with a half-emptied gin bottle on the table.

Fas-ang lay the bag of money on his crossed legs. "Here are the amount the vegetables have brought us," she reported.

"Good," Tanabata responded with a happy smile. He always said gracias after that, showing full trust with Fas-ang. He would pick out two half-peso pieces and give them to her. "Here, take this, they are for you, buy yourself whatever you like." For he was a prosperous, generous gardener.

On weekdays, there was hard and honest work in the garden. The other native woman had gone away when she felt that she was not favored as Fas-ang was. So, Fas-ang, when she was not cooking, she stayed among the cabbage rows picking worms. Tanabata did was to take care of the seedlings in the shed house. Also, he did most of the transplanting, since he alone had the sensitive fingers that could feel the animate sense of the soil. He had but little area to manage, and only three farm hands to look after.

New life! Fas-ang liked the daily turns that were her lot. Little by little she learned to do the domestic chores, during morning, noon and evening she cook in routine. She washed clothes occasionally, and more when the laundress came irregularly. She swept the house and of course, she never forgets to leave a tea kettle steaming over live embers at any time, because, Tanabata might come in and sip a cup of tea.

III

In the afternoon on weekdays, when the sun was hot and the leaves were almost wilting, Tanabata like to stroll and visit his neighbor, Okamoto-san. They were of the same province in Japan, Hiroshimaken. Okamoto had a Benguet wife, Kawane, who was an industrious and amiable companion. The only fault Okamoto found in Kawane was her ignorance. She had no idea of the world beyond her small valley.

One afternoon again, Tanabata as usual visit his friend. This was a great consequence, for he had a mind to ask Okamoto if he thought Fas-ang could be a fit wife for him. Tanabata was hesitant in raising that topic to his friend, but happened to say this direct as:

"I think I shall marry that woman," Tanabata said.

"Which woman — Fas-ang?" Okamoto said.

"Yes"

"She is good woman, I think. She seems to behave well."

"I have known her only for a short time. Do you think she will behave well always?" Tanabata asked sincerely.

Okamoto was hesitant and would not be explicit, "I cannot tell. But look at my wife, she's a peaceful woman," he answered simply.

"There, my good friend," Tanabata reminded his friend, "you forget that your wife is of the Benguet tribe, while Fas-ang is of the Bontoc tribe."

"Yet they are good friends — as much as we are," was Okamoto's bright response and they both laughed.

IV

Two days later Tanabata proposed to Fas-ang. He had frequently teased her before. But now he was gravely concerned about what he had to tell. He had great respect for this sturdy native woman.

He called Fas-ang into the big room where she heretofore seldom entered except to clean. It was dimly lighted. Fas-ang went in, unafraid. It seemed she had anticipated this. She sat close beside him on a trunk. Tanabata talked carefully, convincingly, and long. He explained to her as best as he could his intentions. At last, she yielded. Without ceremony and without the law, they were wedded by a tacitly sworn agreement between themselves.

As before Fas-ang did not find difficult to tend the truck garden. To be sure, it was sometimes dull. Now and then she would get exasperated with the routine work. But only for a short time. Ordinarily, she was patient, bending over the plants as she rid them of their worms, or gathering them for the sale in the market. Her hands had been trained now to

handle with care tender seedlings, which had to be prodded to grow luxuriantly.

When the sunbeams filled the valley, and the dewy leaves were glistening, it was a joy to watch the fluttering white butterflies that flitted all over the garden. They were pests, for their chrysalids mercilessly devoured the green vegetables. Still, their advent in the bright morning could stir the laborers to be up and doing before they, themselves, were outdone by the insects.

In time, Fas-ang was introduced to Japanese customs. Thus she learned to use chopsticks after being prevailed upon by Tanabata; they had a zinc tub outside their hut in which they heated water and took a bath in the evening; Fas-ang pickled radishes after the Japanese fashion, salting them in a barrel; she began to use wooden shoes, though of the Filipino variety, and left them outside their bedroom before she retired; she became used to drinking tea and pouring much toyo sauce in the vlands; mattresses too, and no longer a plain mat, formed her beddings.

A year after they were married, they had a child, a boy. The baby was a darling. Tanabata decided to celebrate. He gave a baptismal party to which were invited his Japanese friends. They drank sake, ate Japanese seaweeds, pickles, canned fish, etc.

But Fas-ang, in all this revelry, could not understand the chattering of her guests. So, she was very quiet, holding the baby in her arms.

The men (there were no women visitors) had brought gifts for the baby and the mother. Fas-ang was very much delighted. She repeatedly muttered her gracias to all as gifts were piled before her.

Then the men consulted the Japanese calendar. The child was given the name Kato and the guests shouted banzai many times, tossing glassfuls of sake to the ceiling. They wished the mother and child, good luck.

Tanabata was most solicitous toward Fas-ang as she began to recover from the emaciation caused by her strenuous childbirth. He would now allow her to go out. She must stay indoors for a month. It was another Japanese custom.

At length, when August had passed, Fas-ang once more stepped out into the sun shine, warm and free. The pallor of her cheeks had gone. She was alive and young again. Her usual springy steps came back, and she walked briskly, full of strength and passion, it seemed.

V

But what news of home? Fas-ang yearned to hear from her people back in Besao Bontoc. Had the kaingins been planted with camote and corn? Her kinsmen had heard of her delivering a child, and they sent a boy-cousin to inquire about her. He was told to see if Fas-ang lived happily, and if her Japanese husband really treated her well. I not, they would do him harm. The Bontocs or busol are fierce. The cousin came. Tanabata entertained the cousin well. He bought short pant for the Igorot boy and told him to do away with his G-strings. The boy was much pleased. After a week, the boy said he would go back. And Tanabata bought some more clothes for him.

Fas-ang saw her cousin off. Tanabata was then in the shed house, cultivating the seedlings. Fas-ang instructed her cousin well: "Tell Ama and Ina I am happy here they must not worry about me. My husband is kind. Give them this little money that I have saved for them. You see, I have a child, so I shall live here long yet. But I do wish to go home sometime and see Ama and Ina. Often feel homesick. She wept. And when her cousin saw her tears, he wept too. Then they parted.

VI

It was no hidden truth that Tanabata loved his wife dearly. In every way, he tried to show his affection. Once, he had not allowed her to go to the city to see the movies. But he repented after wards and sent her there without him asking.

Fas-ang that soon became a cine fanatic. She went to shows with one of the garden boys and sometimes she took her baby along, carried on her back. They had to take kerosene lamp with them to light their way coming home when they return near midnight. Tanabata alone, stays at home. He sat up late reading Japanese novels. When Fas-ang arrived, she would be garrulous with what she had seen. Tanabata held her under the thick blanket to warm her cold feet, she would then easily fall asleep and only after her that he would rest himself to sleep.

More and more, Fas-ang liked to attend the shows. The city was two miles away. But that did not matter. The theater was fascinating. Moreover, Fas-ang admitted, she often met several of her relatives and townmates in the theater. They too,

had learned to frequent see the cine and together they had a good time.

Tanabata asked Okamoto what he thought of Fas-ang's frequenting the shows. Okamoto, being less prosperous and more conservative, did not favor it. He advised Tanabata to stop her. But Tanabata was too indulgent with Fas-ang even to intimate such a thing to her. Though inclined to be cautious, he loved her too much to deny her any pleasure she desired.

Thus Fas-ang, after the day's duties, would run off to the show. Tanabata had grown even more lenient. He could never muster courage to restrain her, much less scold her. She never missed a single change of program in the theater. Tanabata did not know what to do with her. He could not understand what drew her to the cine. For his part, he was wholly disinterested in screen shows which he had attended but once long ago, and with which he had been disgusted. Still Fas-ang continued to attend them as devotedly as ever.

VII

One night she did not come home. She returned in the morning. Tanabata asked where she had slept, and she said, "With my cousin at the Campo Filipino." She had felt too lazy to walk all the way down to the valley, she said.

That whole day, she remained at home. Tanabata went out to the garden. Fas-ang rummaged among her things. She tied them into a bundle which she hid in the corner. She dressed her child.

Then, at midnight, when Tanabata as sound asleep, she escaped. She carried her child and ran down the road where her lover was waiting. They would return to Bontoc, their native place. The man had been dismissed from the military post at Camp John Hay.

Fas-ang left a note on the table before she left. It had been written by the man who had seduced her. It read: Do not follow us. We are returning home to Bontoc. If you follow us, you will be killed on the way! When Tanabata had the letter read to him he dared not pursue the truant lovers. The note was too positive to mean anything but death if disobeyed. He was grieved. And for three days, he could hardly eat. He felt bitter, being betrayed and deserted. Helpless, he was full of hatred for the man who had lured his wife away.

Okamoto, faithful indeed, came to comfort his friend. He offered to come with his wife and live with Tanabata. But Tanabata would not consider their intention. Nor could he be comforted. He politely begged his friends to leave him alone. He had suddenly become gloomy. He sat in his hut all day and drank much liquor. He stuck up himself inside his hut. The truck garden was neglected.

Months passed. The rows of cabbage were rotting. Tanabata was thought to be crazy. He did not care what happened to the plants. He had dismissed the new helpers that were left him. Weed outgrew the seedlings. The rainy season set in, and the field was devastated by a storm. Tanabata lived on his savings. The rainy season passed. Sunny cold November came to the hills. Months more, Tanabata would perhaps go home to die in Japan. His hopelessness had not been lessened. When he thought of his lost boy, he wept more.

VIII

But, one evening, Fas-ang came back. She stood behind the house, scanning the wreck left of what was formerly a blooming garden. She had heard back home, from wayfarers who had returned, of Tanabata. The man who had alienated the affections of Fas-ang had left her.

"Your Japanese husband is said to be ruining himself," some reported.

"He pines for you and his boy."

"It is said he is thinking of going home across the sea, but he must see his little son first," also, others informed her.

Fas-ang at once decided. "Then I must return to him before it is too late." And so, she came.

In the twilight, she stood, uncertain, hesitant. She heard the low mournful tune arising from the bamboo flute that Tanabata was playing. What loneliness! Fas-ang wondered if that now seemingly forbidding house was still open to her. Could she dispense the gloom that had settled upon it? There was a woman's yearning in her. But she hesitated in her determination, feeling ashamed.

The music had ceased. She almost turned away when the child, holding her hand, cried aloud. Tanabata looked out of the window, surprised. He saw the mother and child. He rushed outside, joyfully. Gently, he took them by their hands and led them slowly into the house. Then he lighted the big lamp from the ceiling that had long hangd and unused.

連載 ナビ流ゴルフ 11



新しくなったゴルフシミュレーション。 練習、コンペ、イベントに活用しよう。

先月行われた男子ゴルフの今季メジャー第1戦、マスターズ・トーナメントでタイガー・ウッズが優勝した。苦難を乗り越えての劇的な優勝に感動し、ゴルフ熱が再燃した人もいると思う。そこで、ゴルフ上達をめざす人に、改めておすすめしたいのがゴルフシミュレーション。マニラに赴任して間もなく、ゴルフシミュレーションができる場所を探している方、そして、すでにこちらで体験した方にも、新しくなったゴルフシミュレーションバー「1248 ゴルフクラブ」を紹介したい。

新しく広がったブース。大人数で楽しめる

昨年、首都圏マカティ市ブルゴスにオープンした「1248 ゴルフクラブ」。在住邦人をはじめ各国のゴルフ愛好家に親しまれている中、3月下旬に移転し、リニューアルオープンした。移転先は旧店舗から歩いて2分のところにある。

旧店舗との最も大きな違いは、シミュレーション・ブースの大きさ。広がったブースで大人数でものびのび楽しくプレーを楽しめる。シミュ

レーションゴルフでコンペを開催するのもピッタリ。もし雨天などでコースに出ることができない日でも、屋内のシミュレーションなら心配無用。また忙しくてコースに出ることができない時でも、1248ならマカティ市ブルゴスにあり、深夜3時まで営業しているのでいつでも立ち寄れる。ゴルフができないストレスもこれで解消。

ゴルフを始めるなら、まずはシミュレーションから

1248の日本製ゴルフシミュレーションは楽しいだけでなく、ゴルフの上達に役立つ。実際にゴルフボールを打つと、スイングが映像で再現され、飛距離、ヘッドスピード、ボールの弾道などが数値で表示される。打ち放しの練習では

なかなかわからないポイントでも、シミュレーションなら気付くことが可能。最近プロゴルファーが積極的にシミュレーションを練習に取り入れている。

スイングの練習だけでなく、実際にゴルフコースでのプレーを疑似体験できるのもシミュレーションのいいところ。50以上のゴルフコースから選べ、米国のオーガスタや、英国スコットランドのセントアンドルーズといった世界の名門コースにも挑戦できる。天候や風向き、コースの難度も設定可能だ。

1248に愛用のクラブを持ち込んでシミュレーションすることももちろん、無料の貸出クラブもあるので、手ぶらで来ても楽しめる。女性用クラブセットも用意されている。これからゴルフを始めたいと思っている人にとっては、シミュレーションはゴルフコースに出るまでの基本練習に最適。日本人スタッフに気軽に相談してみよう。

■ 1248G.C. リニューアル新店舗への行き方：旧店舗から歩いて2分。もし間違えて旧店舗に行ってしまうと、焦る必要はない。



コースを再現したシミュレーションで実践練習を



飛距離等の数値が表示されるほか、クラブとボールのインパクトの瞬間も映像で見ることができる



コンペをすれば盛り上がることも間違いなし



グループでの利用に対応できる広いシミュレーション・ブース。スイングする人との間隔も十分あり、安全面も配慮



試打できるショップ併設 イベント会場として利用も

日本と違い、マニラではゴルフクラブを買う時に試打できる場所があまりない。そんな中、1248には新品と中古クラブを扱うショップが併設され、シミュレーションマシンで試打できる。在庫クラブの情報はフェイスブック（1248gcで検索）でチェック。気になるクラブがあれば、来店して試打してみよう。さらに、クラブの委託販売も行っているの、帰国の際など不要になったクラブを預けて売ることでもできる。

1248 ゴルフクラブは、シミュレーションを使っ

てのコンペのほか、各種パーティーやイベント会場としても使える。クラブ内でビールやソフトドリンクも販売しており、キッチンの開設も進行中で、近日中に食事の提供も開始。ゴルフシミュレーションが楽しめるだけでなく、エンターテインメント・スペースへと進化する1248に乞うご期待。



併設のクラブショップには、シミュレーションでのドライビング飛距離ランキングを掲示



1248 G.C.
Ground Floor, Matheus Bldg., 5382 General Luna, Makati City
Tel: 0966-552-1122 (Globe) / 0918-629-9123 (Smart)
営業時間 1pm - 3am 無休
Facebook: 1248gc で検索

本格「ゴルフシミュレーションバー」 移転リニューアルオープン！



- ◎日本製ゴルフシミュレーター2台 ◎正確な弾道、飛距離を測定
- ◎世界の有名コースをラウンド ◎クラブ無料貸出。女性用もあり
- ◎初心者も楽しめる ◎中古ゴルフクラブ委託販売（購入時試打可能）

新所在地：Ground Floor, Matheus Bldg., 5382 General Luna, Makati City

Tel: 0966-552-1122 (Globe), 0918-629-9123 (Smart) 営業時間 1pm - 3am 無休

※詳細は Facebook(1248gc で検索) で随時アップ。



ポイ捨ては「違法行為」 首都圏で 4,300 人逮捕 Littering is a Criminal Offence in Manila

マニラの街を歩くと、道端にゴミが捨ててあるのを見る。私は、マニラは公共の場所へのゴミ捨てに対して寛容な街だと勝手に思っていた。しかし、英字紙「スター」（4月10日付）によると、首都圏開発局（MMDA）は今年1月から3月の間にゴミのポイ捨て容疑で4,316人を逮捕したという。MMDAのウェブサイトには、ゴミのポイ捨てを禁止する法律が1996年9月に施行され、その後施行停止などを経て、2010年9月から再施行された、とある。

今回逮捕者が多かった地域は、首都圏カロオカン市モニュメント、ケソン市クバオとノースEDSA、マカティ市グアダルベとブエンディア、パサイ市オルティガス地区とEDSA-タフト。捨てられたのは菓子の包装、たばこの吸い殻、紙くず、プラスチックなど。ポイ捨て容疑で逮捕されると、Environmental Violation Receipt (EVR) が渡され、500ペソの罰金または8時間の社会奉仕活動が科される。今回逮捕された1,487人は罰金を払い、32人が社会奉仕活動をした。EVRを無視している残り2,297人は「より厳しい罰を受けることになる」とMMDAは警告している。（T）

Walking on the streets in Metro Manila, you see garbage scattered all over. I didn't think littering is prohibited by law here. In April, however, I read the news in a newspaper that 4,316 litterbugs were apprehended by MMDA from January to March this year. So here is a law against littering in Metro Manila. Violators who throw away cigarette butts, plastic etc. face a fine of 500 pesos or eight hours' of community service. Littering not only spoils the scenery of the city but also causes flooding. In Southeast Asia, Singapore is known as a city state which imposes a fine on litterbugs. Will Metro Manila be a clean city like Singapore someday?



ボニファシオ・グローバルシティ（BGC）の空き地に捨てられた無数のタバコの吸い殻。2018年11月撮影。
Bonifacio 'Garbage' City? : Countless cigarette butts at a vacant area in BGC (November, 2018)

みなさんこんにちは! Kumusta kayo?
フィリピンでは4月から5月が一年で一番暑い季節「tag-init」(タグ・イニット)にあたります。Tag-は季節を表す接辞、そしてinitは「暑さ、暑いこと」を表す言葉ですから、「暑い季節」= tag-initとなります。5月も半ばをすぎると、少し雨が降り出し、6月に入ると雨季 tag-ulan (タグ・ウラン)に入ります。そしてジメジメと雨が降り続き、空は厚い雲に覆われます。7月から8月は日本では夏にあたりますが、フィリピンではこの時期にはほぼ毎日のように曇りまたは雨、時々台風が来るので、4月5月とくらべるとそれほど暑くはありません。この雨季は10月末まで続き、11月になると乾季 tag-araw (タグ・アラウ)に入ります。12月から2月までは乾季でありながら比較的涼しく、一年で一番過ごしやすい季節です。涼しい季節、また寒い季節(日本の冬など)は tag-lamig (タグ・ラミグ)と呼ばれます。

フィリピンの季節は、このように大きく乾季 tag-araw と雨季 tag-ulan に分けられま

Filipino World フィリピン・ワールド 第30回 Panahon 季節 フィリピン語 アレ・コレ

すが、この気候の変化には季節風が大きく影響しています。通常、6月から10月にかけて南西季節風 habagat (ハバガット) が吹きます。フィリピンの南西の海上から温かく湿った空気が流れ込み、これがマニラを含むフィリピン諸島の西側に雨をもたらします。東の海上から台風や熱帯低気圧がやってくると、南西からの湿った空気がより活発に流れ込むため、たとえ台風が直撃しなくてもハバガットによる大雨が断続的に降り、洪水になることもあります。11月ごろになると、アジア大陸の気温が

下がり高気圧が発生します。日本では「西高東低の冬型の気圧配置」と言われる状態です。アジア大陸から偏西風に乗って日本付近を通り、一旦太平洋側に流れ込んだ冷たく乾燥した空気は、今度は東から吹く貿易風に乗って、北東から南西に向かって流れ込む北東季節風 amihan (アミハン) となります。フィリピンの西側は涼しく乾燥した天候になり、東側には雨が降りやすくなります。

さてフィリピン語では季節のことを panahon (パナホン) と言います。しかし panahon には「時間」「時期」「天候」という意味もあり、季節のことだけを示しているわけではありません。たとえば hindi pa panahon と言えば「まだ時期ではない」、という意味ですし、walang panahon と言えば「時間が無い」という意味になります。昔話は「むかしー、むかし」という意味で「Noong unang panahon」で始まり、天気予報のことは taya ng panahon と呼びます。日本人にとっては、時間も時期も季節も天候もひっくるめて panahon という

一つの言葉しか無い、というのは驚きですが、季節と言えば「雨季」と「乾季」の二つしかなく、天気予報と言っても雨季には毎日雨が降る、乾季には毎日晴れる、時々雨なのですから、日本のように四季がある上に、節分だ、彼岸だ、土用だ、と細かく分ける必要もなかったのでしょう。一般的に日本人に比べてフィリピン人が時間に対しておおらかでたまかなのも、こういった気候に影響されているのかもしれないですね。



文: デセンブラー悦子

日英・タガログ語通訳。大阪外大フィリピン語学科卒。在学中にフィリピン大学に交換留学。フィリピン人の夫と1992年に結婚、以後マニラに暮らす。趣味はダンスだが、最近は時間が取れないのが悩み。

新
New

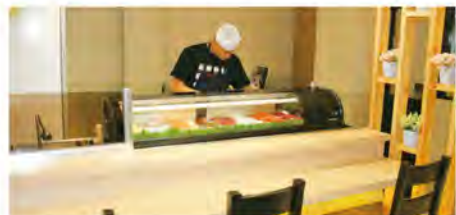
ブルゴスで楽しむ本格和食 ランチから夜食までおまかせ

A Real Japanese Food Restaurant in Burgos
Offers a Full Range of Delectable Dishes

マカティ市の繁華街ブルゴスに、待望の日本料理店「JP Ryu 蜂須賀レストラン」がオープン。韓国料理店が多いブルゴスで、本格和食を楽しめる数少ない店だ。

広く明るい店内には寿司カウンターがあり、寿司と刺身は自慢のメニュー。前菜約30種、ヘルシーなサラダ、鉄板焼、ステーキ、天ぷら、焼き物、煮物、揚げ物などの一品料理、麺類、丼物と、品数がとにかく豊富。酒のおつまみにピッタリの居酒屋メニューから定番和食までそろっている。

お得なランチ弁当 (11am~2pm) は、刺身、焼肉、天ぷら、エビフライ、唐揚げ、とんかつ



の6種類。サラダ、野菜炒め、味噌汁などが付いてボリュームたっぷりですが250ペソからとコストパフォーマンス抜群。

テーブル席のほか、VIP席があり、ビジネスの接待や会食にも利用できる。ランチにディナー、仕事帰りの一杯、さらに深夜4時まで営業しているので夜食もOK。ブルゴスで日本料理が食べなくなったら、いつでも JP Ryu 蜂須賀レストランへ。

JP Ryu Hachisuka Restaurant is one of the few that offers authentic Japanese food in Burgos. The restaurant boasts of serving a wide variety of Japanese food such as sushi served over the counter, 30 kinds of appetizers, teppan-yaki, tempura, noodles and rice bowls. During lunch time, check out good value for money bento boxes. JP Ryu Hachisuka Restaurant satisfies Japanese food lovers for lunch, dinner, hangout & drink and late night supper.



広い店内にはバーカウンターも



ランチタイムの焼肉弁当 (250 ペソ)



JP Ryu Hachisuka Restaurant
48 Polaris Center, Polaris St., Poblacion, Makati City
Tel: (02) 962-1642 Opening Hours: 11am - 4am

KOBEYA 神戸屋 JAPANESE FOOD MART 日本食材

豊富な品揃えて お客様の健康的な食生活をサポートいたします。



Tel. 807-1107 GF Juno cor. Makati Ave., Bel Air, Makati City Email: kobeyafoodmart@yahoo.com



McASIA 日本食レストラン経営者様、必見! マック・エイシア食品卸売会社

Total Japanese Cooking Solution
弊社はケソン市に事務所を構える食品卸売会社です。フィリピン国内ではビサヤ、ミンダナオ両地方までの配達を受け付けています。調味料各種はケースでの販売はもちろん、全て業務用サイズまで取り揃えています。醤油、サラダ油、薄力粉などの基本的な調味料に加え、生乾焼きソース、ラーメンスープ、梅ペーストなど日本食レストランには欠かせない商品の在庫が揃っています。長年レストラン経営に携わってきたオーナーだからこそ実現する、細やかなニーズへの対応が強みです。

McASIA Foodtrade Corporation 158 Apo St., corner NS. Amoranto, Brgy. Maharlika, Q.C. TEL: (02) 251-3625/411-2911
FAX: (02) 415-4431 営業時間: 8時~18時 休日: 日曜 E-mail: mca.mcasia@yahoo.com, mcasiafoodtrade@yahoo.com.ph

あなたのお好きな食べ物を、好きなだけ

TONG YANG
しゃぶしゃぶと焼肉レストラン
www.tongyanghotpot.com

飲み放題 & 食べ放題!
ランチとディナーのビュッフェ しゃぶしゃぶと焼肉
*税込み、サービスチャージ無し

SM MEGAMALL (02) 631-3637, 470-3638 JUPITER MAKATI (02) 899-3388, 897-4148 SM CITY FAIRVIEW (02) 332-5236, 351-7838
CENTRIS WALK EDSA (02) 217-9784, 217-5735 ROBINSONS PLACE MANILA (02) 354-3168, 585-7157 PROMENADE GREENHILLS (02) 463-2625, 655-7311
SM CITY GENERAL SANTOS (083) 878-0480

Minami
Cafe & Restaurant
Tel: (02) 247-0788 Cel: 0917-4698986
G/F Pan Pacific Hotel Adriatico Square cor. Gen. Malvar Adriatico, St. Malate, Manila

お客様の心もお腹も満たします。

ハロハロ・ノート

～とっておきのフィリピン～

第29回
Saging na Saba

サバ・バナナ

調理用のバナナとして知られるサバ・バナナ。フィリピンでは、素揚げにして大学イモのようにカラメルをまぶしたバナナ・キューや、ジャックフルーツと一緒に春巻きの皮で巻いて揚げたトゥロンがポピュラーです。豚肉のニラガと呼ばれるスープ料理にもサバ・バナナが入っていることがあります。フィリピンのお土産としても定番のバナナ・チップスはこのサバ・バナナが原料として作られていますし、完熟して皮が黄色くなったものは生食もできます。生で食べてみる



と、一般なラカタン・バナナより、やや淡泊でモチモチしてトロツとした食感が特徴です。フィリピンではサバ、またはサギン・ナ・サバと呼ばれるほか、カンダバ・バナナとも呼ばれます。トマト・ケチャップが高価なフィリピンでは、バナナから作ったバナナ・ケチャップも販売されていますが、この原料になるのもサバ・バナナです。子供のころから慣れ親しんだバナナ・ケチャップのほうがトマト・ケチャップより好きだというフィリピン人も少なくありません。サバ・バナナの花は赤くて心臓のような形をしているため、プソ・ナン・サギン（バナナの心臓）と呼ばれ、野菜として市場で売られています。外側の堅い皮の部分と、花の部分は廃棄し、中の柔らかい部分だけを調理します。

サバ・バナナには炭水化物の他、ビタミンB群、食物繊維、ビタミンC、ビタミンA、そして鉄分が含有されており、生食用のバナナよりもカリウムが多く含まれます。カリウムは体内の余分な

塩分を対外に排出してくれるため、健康な血圧を保ったり、むくみを解消するために役立つ上、発汗によって崩れやすい電解質のバランスを整え、足が攣るのを予防してくれる働きも期待できます。またこのカリウムが、尿酸が結晶化して関節などに溜まるのを防ぎ、体外へ排出してくれるので、関節炎の予防にもなると言われています。最近の研究では、運動中または運動後にバナナと水分を摂取すると、筋肉の炎症を抑える効果が得られることがわかってきているそうです。

また一般的な方法ではありませんが、筆者のおすすめは、黄色く熟したサバ・バナナを皮ごとさっと洗い、フォークでブスブスと突き刺して



穴を開け、5～6分程度電子レンジにかけて、皮をむいて食べる方法です。これなら茹で汁にカリウムが流れ出てしまうこともありませんし、さっと手軽に作って食べられます。暑い季節のカリウム補給に皆さんも活用してみてください。(悦)



本場博多のもつ鍋をマニラで オリジナルメニューにも注目 Nutritious Motsunabe Hotpot For Your Health and Beauty

本料理店が数多くあるマニラでも、あまり出合えない郷土料理がある。もつ鍋もそんな料理の一つだろう。そしてマニラ在住邦人のもつ鍋へのラブコールにこたえるかのように、先ごろマラテに日本料理店「梟（ふくろう）」がグランドオープンした。

同店では、魚介スープと沖縄の自然海塩からつくるあっさりとしたスープに山芋とろろをたっぷりトッピングする雪見鍋をはじめ、塩鍋、みそ鍋、しょうゆ鍋があり、好みの味のもつ鍋を選べる。もつが苦手な人は、代わりに牛肉や豚肉のスライスを選ぶこともできる。

もつ鍋は、おいしさはもちろん、コラーゲン、ビタミンなどをたっぷり含み、しかも低カロリー。美容と健康に優れた効果が期待できることも魅力だ。最近疲れ気味だったり、野菜不足を感じているなら、もつ鍋でエネルギー補給をしてみたいかがだろう。

梟では、もつ鍋のほかにも鍋スープを素に開発された絶品ラーメン、肉汁たっぷりのもつ餃子、特製塩だれが牛もつの味を引き立てる石焼もつ焼きそば、チーズと野菜たっぷりの石焼タコライス、子どもに人気の石焼もつバーガーなど、オリジナルメニューも充実。

店内は全個室のテーブル席または掘りごたつ席。家族やグループで落ち着いて食事を楽しむことができる。



You may have tasted some Japanese hotpot dishes in the Philippines. Sukiyaki and shabu shabu are getting more popular and popular among Filipinos. How about Motsunabe? Motsu means beef or pork tripe and offal, nabe means pot in Japanese. Motsunabe is a local delicacy of Hakata, Fukuoka City in Kyushu Island. Fukuro (Owl in Japanese) is a unique and special restaurant in Manila, which specializes in motsunabe. In Japan, motsunabe is believed to be good for health and beauty as it is a low calorie food with rich in collagen and vitamins. At Fukuro, there are also sliced beef and pork meat available instead of motsu for those who don't care for tripe or offal. Don't miss Fukuro's original menus including gyoza, ramen, taco rice and Hamburg steak.



スタミナ食材として知られる山芋かけていただく雪見鍋。もつ鍋の締めには雑炊やちゃんぽんがおすすめ。



もつ鍋 ファンにはたまらないラーメン



Japanese Restaurant FUKUROU 梟
597 San Andres St., Malate Crown Plaza, Malate, Manila
Tel: (02) 543-8524 / 0929-228-7776 / 0905-662-0281
Opening Hours: 6pm - 3am

西洋占星術師 5/1～5/31

シャクティーの 今月の星占い

プロフィール: シャクティー
各国の秘術・タロット・風水・西洋東洋占星術。各種新聞雑誌、Yahoo!やLINE占いでも人気! 運命研究歴25年、鑑定3万人以上のプロ占星術師。2012年渡比。Makatiにて、個人またはグループセッション&レッスンあり



★予約はこちらへQR→
Text→09086098602
shaktibless@gmail.com
http://shakti-b.jp



おひつじ座 [3月21日から4月20日] 増収の兆しが見える時期です。ただしビジネスや家の事柄に使うのが鉄則。仕事の基盤を固めたり、家族サービスを考える。	おうし座 [4月21日から5月21日] 次第に上昇気流の影響を感じ取ることが出来る時期です。金運は不安定ながらも、取り組むべき事柄にチャレンジして開運へ。	ふたご座 [5月22日から6月21日] 社交に彩りがあるものの、自分の時間も取りやすくなってきそう。決断は前半に、後半は整理や精神的な癒しを求めて吉。	かに座 [6月22日から7月22日] 長期的なスケジュールを描く必要がありそう。過去の願望にとらわれず、新しい未来を描くモチベーションアップに。
しし座 [7月23日から8月22日] 前半は気遣いの場面もあるものの、周囲に期待されて頑張れる時期。スキルアップや自分の強みになるはず。後半は休憩も必要に。	おとめ座 [8月23日から9月22日] 状況や経験から、これまでの考えに変化が出てきそうな時期です。いつもは行かない場所や、人と会うことで直感が冴えるはず。	てんびん座 [9月23日から10月23日] 心の中の変化が起こりそうな時期です。頑張ろうと思っていた事柄に興味なくなったり、逆に意外な楽しみを見つけるかも。	さそり座 [10月24日から11月22日] 出会いや別れの暗示があるものの、一期一会を意識したい時期です。対人面やモノには、執着心を持たないよう心がけて開運へ。
いて座 [11月23日から12月22日] 賑やかな楽しさを味わえますが、次第にすべき事柄が溜まってきそうな時期。これまでとは違うアプローチ法で解決して。	やぎ座 [12月23日から1月20日] 細かな仕事を片付けたり、意外な幸運が待っている時期です。新しい趣味や好みのタイプの人との時間を満喫して気付きあり。	みずがめ座 [1月21日から2月19日] 家族サービスや身の周りの整理に幸運が潜む時期。断捨離や引っ越しなど、環境を変えてみては? 夢に近づく一歩となる予感。	うお座 [2月20日から3月20日] まったりとした時間を楽しめる前半から、後半は苦手分野の克服を心がけると良い時期です。ブログや勉強を初めてみては?



～ストロベリー・フェスティバル～

ラ・トリニダードの甘い香りに誘われて。

Attracted by the sweet scent of La Trinidad ~ Strawberry Festival ~

2月のバギオ最大の祭り「パナグベンガ Panagagenga (フラワー・フェスティバル)」が終わると、今度はバギオの隣町ラ・トリニダード (La Trinidad) でストロベリー・フェスティバルが開催される。ラ・トリニダードまではバギオ市街地からタクシーで約30分。バギオ市内に2カ所ある乗り場からはジブニーも頻繁に出ていてたいへんアクセスがいい。

年間を通して涼しいラ・トリニダードはイチゴの栽培に適していて、町中にあるストロベリー・ファームではイチゴの露地栽培が盛ん。フィリピンではイチゴを作っているところが少ないことから、バギオを訪れる観光客の土産品としても人気ナンバー1だ。

12月から4月までは町中にあるストロベリー・ファームでイチゴ狩りも楽しめ、バギオを訪れる観光客はトリニダードに足を延ばす。特に1981年より毎年開催されているストロベリー・フェスティバルの期間は、観光客で非常に賑わう。

今年のストロベリー・フェスティバルのメインイベントは、3月中旬に行われたストリートダンス、そしてフラワー部門とリサイクル製品部門という2つのカテゴリーで競われる花車 (フロート) パレード。そしてなんとといってもジャンボ・ストロベリー・ケーキの展示だった。ケーキはお披露目のあとは試食することもできる。2014年にはなんと9600kg以上の巨大ケーキを作ったとして、ギネス世界記録にも掲載されたそう。

私たちがストロベリー・ファームを訪れたのは太陽がサンサンと照りつける午後過ぎ。ジブニーを降りて少し足を進めると、地元の物産や獲れたてのイチゴはもちろん、イチゴ柄のTシャツ、ジャムやワイン等のイチゴの加工製品が売

られるお土産店が立ち並ぶ。お店の前を通る度に試飲、試食を勧められるため、なかなか前に進めない。おまけをつけてくれたり、値段交渉もできたりするので、ついつい買い物に夢中になってしまい、農園に辿りつく前に土産物で荷物がすっかり膨らんでしまった。

チリンチリンというベルの音につられて屋台に向かうと、売られていたのはストロベリー・アイスクリーム。「絶対に美味しいから!」と満面の笑顔で試食を勧めてくるおじさん。一見人工的なピンク色に味を疑うも、イチゴ本来の自然な甘さと後味に酸味があり、口当たりはさっぱり!!歩き疲れた身体が癒された。

お土産街を抜けると農園へ到着。イチゴ畑が数キロメートルにわたり広がり、遠くに見える



ラ・トリニダードの郊外で見られるイチゴ畑が広がる穏やかな風景 A calm landscape with a strawberry field seen in the suburbs of La Trinidad.

山々とのコントラストが美しい。息を深く吸うと、清涼な空気が肺に沁み渡る。イチゴは艶やかな赤色で、野球のボール大のものから小指先の小さなものまでまちまちだ。一口かじるとみずみずしく、スッパリとした甘さが舌に広がる。イチゴ狩りで取ったイチゴは1キロあたり450ペソを支払う仕組みだ。夢中になって大きなものを探すが、農家の方が小粒の方が甘みが強いと教えてくれた。

購入したイチゴをその場でそのまま口に入れてもよし、家に持ち帰ってジャムにしてもよし。個人的にオススメなのはコップに牛乳、フォークで潰したイチゴ、少しお砂糖を加えたイチゴミルク。ぜひ一度試して頂きたい。

バギオ滞在中に近場で自然を感じたい、美味しいイチゴを堪能したいと思われたら、ぜひラ・トリニダードへ。気軽にリフレッシュ出来ること間違いなしである。

(Share & Guesthouse TALA インターン 福田聡美)



2014年にギネスブックに載ったジャンボイチゴケーキのモニュメント Jumbo strawberry cake monument registered in Guinness Book of 2014.



農場の入口には手書きのサインボードが立ち並ぶ。絶好の撮影スポットだ Hand-drawn signboards line the entrance to the farm. It is a great shooting spot.



地元の名産品、Tシャツ、可愛いイチゴグッズなど沢山の土産が揃っている There are many souvenirs such as local specialties, T-shirts and cute strawberry goods.

C E B U

セブ日本人会からの

セブ通信

歳月が醸成した平和を希求する心

タリサイ上陸記念日

by: 蝶谷 正明 (セブ日本人会)

1945年3月26日朝、セブに近接するタリサイの海岸にアメリカ陸軍12000人が、艦砲射撃と航空部隊の援護を得て上陸してきました。ほぼ3年前に日本軍が上陸したのと同じ浜です。8月15日の敗戦まで続く比日米の軍民に多くの犠牲者を出すセブ島での戦いの始まりです。隣のレイテ島では既に前年10月に連合軍との間に熾烈な戦いが繰り広げられ、日本軍は壊滅的な損害を被って敗退しています。

この海岸では毎年タリサイ市の主催で上

陸記念式典が行われています。ボホール島を間近に臨む海に面した式場では、フィリピン、日本、アメリカの国旗が各国の国歌と共に掲揚され、式典が始まります。本来は日本人は足を向けにくい行事でしたが、10余年前からセブ日本人会の石田武司氏が参加し、今ではステージ上で要人とともに並ぶ氏の姿は恒例になっています。近年では氏の誘いで参加する邦人も徐々に増えてきています。市や州の関係者によるスピーチが続く、軍や警察、青年のパレード、最後に国軍兵士や市民の参加する上陸を模したアトラク

ションで幕を閉じます。本物の上陸用舟艇に分乗した米軍兵に扮した兵士、迎え撃つ日本兵、海水や砂を巻き上げる火薬の炸裂は74年前にこの地で繰り広げられた悲劇を彷彿させます。かつては日本兵による狼藉などが演じられたのですが、石田氏の尽力により前向き、平和的な演出に変わってきました。今年は本来であれば敵対していた人々が一緒に踊って幕を閉じました。70年の歳月が比日米の人々の間に平和を求める心を醸成したのではないのでしょうか。

最後に忘れてはならないのは、式典の始まる前に僧形の石田氏が早朝の砂浜にささやかな祭壇を設け、戦没者に向けて読経する姿がある事です。線香の煙、真水、酒、タバコが菊の花と共に手向けられています。



銀行取引はBDOにお任せください。

法人・個人のお客さまともにジャパンデスクが日本語でサポート致します。



取扱業務

口座開設、ペソ預金、外貨預金、融資 (運転資金、設備資金、住宅ローン、自動車ローン等)、国内為替、外国為替、オンラインバンキング、給与振込、信託、退職金基金、クレジットカード、店舗向けクレジットカード決済端末、社内ATM、資産運用 (株式・債券・投資信託等)、ビジネスマッチング、プライベートバンキング、保険、リース、その他。

毎月第3水曜日

無料セミナー
開催中!

詳細はジャパンデスクにお問合せください

BDO
We find ways®



BDO ジャパンデスク連絡先 BDO Japan Desk Contact Details

住 所	6th Floor, South Tower, BDO Corporate Center, 7899 Makati Avenue, Makati City 0726, Philippines
営業時間	月曜日～金曜日 (フィリピンの祝日を除く) 08:30 ~ 18:00 (フィリピン時間)
日本語 ウェブサイト	https://www.bdo.com.ph/jp/home
メールアドレス (日本語対応)	help-japanese@bdo.com.ph (カスタマーサポート)
電話番号 (日本語対応)	+63 (2) 663-4001



著名人の靴がズラリ マリキナ市「靴の博物館」

If the Shoe Fits, Wear it and
Visit Marikina Shoe Museum



イメルダ夫人の靴は同系色ごとに展示

首都圏マリキナ市は昔から製靴産業が盛んで「フィリピンの靴の首都」と呼ばれている。フィリピンの地元ブランドの靴には Made in Marikina と書かれているものもある。そんなマリキナ市に、靴をテーマにした博物館があると知り、行ってみた。

LRT2 号線サントラン (Santolan) 駅からタクシーで約 10 分。スペイン統治時代に兵器倉庫だったという白壁の建物が博物館だ。入口の前には、昨年 9 月の暴風で倒された樹齢 100 年のアカシアの大木がある。博物館の入場料は 50 ペソ。市の製靴産業の歴史が紹介され、巨大な革靴のオブジェ、フィリピンの歴代大統領や著名人の靴が展示されている。



靴博物館は 2001 年に開館

目玉はロフト風の 2 階フロアを占めるイメルダ・マルコス元大統領夫人の靴コレクションだ。マルコス大統領が失脚すると、イメルダ夫人のぜいたくな暮らしが暴露され、膨大な数の靴のコレクションが世間を驚かせた。展示されているイメルダ夫人の靴は約 250 足。博物館の職員によると、「没収された靴の一部です。夫人は 3,000 足以上の靴を持っていたと言われています」とのこと。

イメルダ夫人が昭和天皇、カーター元米国大統領、キューバのカストロ議長、毛沢東など世界の要人と写った写真も展示されている。当時夫人が海外へ行く時はマリキナ産の靴を履き、フィリピン靴産業の広告塔としての役割も務めていたらしい。

夫人の靴コレクションにはネガティブなイメージがつきまとう。しかしその一方で、これほどのコレクションがあったからこそ、この靴博物館が成立したといえる。「イメルダ・マルコス靴博物館」とした方がインパクトがあるような気もする。現在下院議員のイメルダ・マルコス夫人は、今、何足の靴をお持ちなのだろう。(T)



Shoe / Footwear Museum
J.P. Rizal St., Brgy. Sta. Elena, Marikina City
開館 8am ~ 5pm

いきなり旅行記 Spontaneous Travel Diaries

フィリピンの観光名所を訪れた記者が
思うままに旅を綴る。

インスタ映えスイーツスポット 「デザート博物館」

The Dessert Museum: Heaven for those
who have a Sweet Tooth



バナナビーチにはいったい何本のバナナの模型が使われているのだろう

名前に「博物館」とあり、知的な感じがするかもしれないが、ひと言で言う子どもといっしょに行くのにピッタリのインスタ映えスポットである。昨年 2 月にオープンしたこの博物館にはデザートや世界のデザート解説、といった堅苦しいものはない。ドーナツ、マシュマロ、マカロン、キャンディーなどデザートテーマにした 8 つのフロアがあり、オブジェで遊んで自撮りをできる遊園地みたいなところである。入場料は 799 ペソ。

私はデザート好きの甘党ではないが、グミを愛している。この記事もグミを食べながら書いています。事前に調べたところ、この博物館にはグミをテーマにしたフロアがあるとのことだったので楽しみにしていた。しかし、来てみると、ない。4 月初旬にリニューアルし、グミ、綿菓子、アイスクリームのフロアがなくなったとのこと。ショックである。マシュマロのフロアにおなじみのグミベアが大量にあったので、てっきり試食できるものと思い、「グミください」とスタッフに頼むと「これは展示しているだけです」と言われてしまった。

家族やカップルが楽しく遊んでいるのを見ると、おっさんが 1 人で来るところではなかったと

思い知る。バナナビーチというフロアで、大量のバナナの模型の中にダイブして戯れたい衝動にかられ、大きな井にタピオカゼリー(?)をたたき、怪しいイメージした無数のボールをい人だと思われては困るので我慢した。

今回訪れてこの博物館に何かが足りないと感じたが、それは「フィリピンらしさ」である。フィリピンにあるデザート博物館なのだから、ハロハロやレチエフランをテーマにしたフロアがあってもいいのでは。次回リニューアルの時はぜひ検討していただきたいものだ。(S)



マシュマロだらけのフロア

The Dessert Museum
Unit 124, 126, 127A, Coral Way, S Maison Mall, Conrad Hotel Manila, Mall of Asia Complex, Pasay City
開館 10am ~ 10pm
www.thedesertmuseum.com

海鮮麺

バタ・ティム (豚足の甘辛煮) 中華包子付き

海鮮定食

Meylin Bistro
JUPITER MAKATI
G/F Jupiter Place Bldg.
136-138 Jupiter St., Makati
Tel. 899-6688, 899-8999

Pot & Noodle
SM MALL OF ASIA
G/F North Parking
beside Hypermart,
Tel. 556-0818, 556-0828

Pot & Noodle
SM MEGAMALL
Level 4 MEGA ATRIUM
EDSA, Mandaluyong City
Tel. 634-1261, 634-1281

New Hatchin
Japanese Grocery

MAKATI店
Tel: 897-7207
836-7276
Fax: 890-7209
携帯: 0917-560-7298 Globe
0918-965-2178 Smart

一生鮮食品が自慢の
日本食材店!

Pâtisserie BÉBÉ ROUGE

MABINI店
Tel: 400-9478
Fax: 400-9478
営業時間:
月~日 10am~9pm

CARTIMAR店
Tel: 833-8905-834-1384
Fax: 834-1384
営業時間:
月~土 7am~5pm
日 7am~2pm

Eメール: sales@newhatchin.com

WELCOME TO YOUR HOME IN MANILA.

2108 M.H. Del Pilar St. Malate, Manila
ArmadaHotelManila (02) 526 0888
www.armadahotelmanila.com

ARMADA
HOTEL MANILA

マニラ湾沿い / MOA MANILA BAY AREA / MOA MAP

シーサイド・ダンパ



新鮮な魚介類を味わえる市場とレストランの複合施設。中央の市場で新鮮な魚介を選び購入し、数あるレストランの中から好みの店を選び調理を依頼。調理方法はローカルの定番すっぱさが特徴のシニガンや揚げ物、バター焼きなどなんでもOK。日本料理も可能。

**マニラ・ベイ・クルーズ
Manila Bay Cruise**
マニラベイクルーズの乗船場所。生演奏を聴きながら、ディナーを頂きながらのサンセットクルーズ。海から見るMOAの眺めも新鮮。

**モールオブアジア
Mall of Asia**
国内最大級、世界屈指の規模を誇るショッピングモール。バサイの海岸エリアのランドマークでもあり、交通拠点にもなっている。西側の海岸線はサンセットの鑑賞スポットとしても人気で、遊歩道に沿って軒を連ねるテラスレストランも日暮れと共に連日多くの人々が賑わっている。

**デザートミュージアム
The Dessert Museum**
テーマごとの8つのデザートの世界からなるミュージアム。見るだけでなくマシュマロが飛び交う部屋でマシュマロをキャッチしてみたり、アクティブに楽しめるミュージアムになるようだ。チョココレート・ファウンテンの部屋やドーナツの部屋等々、スイーツ好きには夢のような場所かも？インスタ映えしそうなスポットもあちこちに。

地球上で最高のパーティーを！

CenterStage 歌って、踊って好みのスタイルで楽しもう！

素敵なパティールーム！

ROCKSTAR VIP SUITE Mall of Asia
Bldg. C, SM by the Bay/Seaside Blvd. Pasay City
Tel. Nos. 401-5480, 401-5538, 403-3730
Mob. 0917-385-6729, 0918-355-4626, 0932-383-0478
centerstagektv www.centerstage.com.ph @centerstagekmoa

BIG ROOM Jupiter Makati
JUPITER BEL AIR MAKATI
5/F Jupiter Place 136-138 Jupiter St. Bel-Air, Makati City
Tel. Nos. 895-0005, 896-0006, 401-5600, 710-8999
Mob. 0917-385-6739, 0923-921-4213
centerstagejupiter@yahoo.com centerstagektv@gmail.com



エリアマップ Area Map

Mr. タクシードライバーへ

相変わらず横行するタクシードライバーのルール無視。一方的に乗車拒否されるもはもろん腹立たしいが、乗車させておいて高額料金を吹っかけてきたり、追加料金を求めてくるのも大いに気分を害される。まずはメーター料金で運行するのがルールだろうと諭し、発車させる。すると、この先は渋滞しているからとコースを変更しようとする。普段通りなれた道である。ドライバーよりもこちらに地の利の分がある。構わないからと、予定通りのコースを走らせる。むしろそこに渋滞などない。あきらめたドライバーは素直に目的地を目指す。すこぶる優良な安全運転である。快適なドライブで予想よりも少しだけ早く到着した。気分良好。で、今でしょ？ Mr. ドライバー。乗客に快適なドライブを提供し目的地に到着した今でしょ？ どうぞ胸を張って要求してみてください。「チップをいただけますか？」。そうです、チップはあなたのサービスに対する感謝の対価です。あなたのビジネスが終わる前にチップはありません。

サルセド・サタデー・マーケット
Salcedo Saturday Market
毎週土曜日、オーガニック野菜や花や特産品、フード類も並ぶマーケットが開催される。他では入手できない一品が見つかるかも。

アヤラ・トライアングル
Ayala Triangle
毎年クリスマスシーズンになると開催される光と音楽のイルミネーション・ショーには大勢の人が集まる。

グリーンベルト・パーク
Greenbelt Park
その名の通り豊かな緑を配し、都会のオアシスとして人気。周囲の5棟に分かれたファッションモールには数多くの有名ブランドや有名レストランなどがあり、フィリピンの流行発信地でもある。

アヤラ・ショッピングセンター
Ayala Shopping Center
Greenbelt から Landmark、Glorietta、SM Makati まではモール内、デパート内を通過して MRT Ayala 駅まで行ける。涼しく、雨にも濡れず快適。

アヤラ駅
Ayala Station
マカティの中心駅。ここを経由する MRT (メトロマニラ高架鉄道) は、旧都ケソン、マカティに次ぐ経済都市オルティガス、交通拠点エドサを結ぶ。駅からグリーンベルトまでの間は SM、グロリエッタ、ランドマークとショッピングモールで繋がっている。BGC に向かう場合はエドサ通り側に BGC バス (12 人) のターミナルがある。

萬里 BANRI NOODLE HOUSE

sushi bar and japanese restaurant

地元のの人に絶大な人気を誇る

老舗の日本食レストラン。たくさんのファンがいます。新鮮なネタを厳選したお寿司や、丼物、種類など、和食から中華まで品揃え豊富で常連の舌も飽きさせません。日替わりランチメニューも豊富で常時10種類ほどあります。毎日少しずつ入れ替わるランチを楽しむのも好いですね。

ラブラブお店 Tel. (032)341-3720
Hiway Pusok, Lapu-Lapu City
月-土: 11:00am - 2:00pm / 5:30pm - 10:00pm
日: 11:00am - 10:00pm

パニラッドお店 Tel. (032)234-0788
Crossroads Mall, Banilad, Cebu City

ヘラルドスイートはマカティ・シネマ・スクエアの前にあります。
日本人の方々に満足いただけるよう完備されたホテルです。
はつはなレストラン、喫茶室、禁煙ラウンジもご利用いただけます。
*朝食付です(日本食、アメリカン、フィリピン)。
皆様のご予約をお待ちしております。

Tel. 759-6270 to 81 | Address: 2168 Pasong Tamo St., Makati City
E-mail: reserve@heraldsuites.com | Website: www.heraldsuites.com

MAKI PLATTER

巻きプラッター

PHP 1,260.00++

Available in
HERALD SUITES
Where I'd like to be

For reservations please call : (02) 759 6270 local 2124 | 0917 316 9250 or 0939 938 3718

深夜にしっかり食べたい時にも。

I7 Japanese Bar & Restaurant

ディーセブン

2F Ginbo Bldg, 824 Arnaiz Ave.
(Pasay Road), Makati
Tel. 893-7425

和風ハンバーグ、ふわふわ卵のオムライス…
つまみは本場仕込みの串揚げが人気。
朝 6 時まで営業！夜の遅い時間でも日本食のごはん・おつまみをお召し上がりいただけます。
23 時より入口近くのお席はファミリーカラオケが利用できるようになっていますが、奥のお席・個室は通常営業しております。

夜6時～朝6時まで営業！

フォートボニファシオ・グローバルシティ
FORT BONIFACIO • GLOBAL CITY MAP





www.jinjianginnortigas.com | www.jinjianginnmakati.com



(located within Bonifacio Global City)

 JTBPHILIPPINES

エルミタ&マラテ ERMITA & MALATE MAP

Robinson's Place Manila
ロビンソンズ・プレース・マニラ

マラテ・エルミタ地区最大のショッピングセンター。ショッピング、食事、映画鑑賞など様々な目的で連日多くの人々で賑わう。館内は清潔で快適な温度管理がなされているので、街歩きで汗をかいたらクールダウンにふらっと立ち寄ってみるのもいいかも。

Robinson's Place Manila
ロビンソンズ・プレース・マニラ

冬陽 (GF)



マニラ湾
Manila Bay

世界三大夕陽とされサンセットがとくに有名なマニラ湾。ロハスブルーパード沿いのベイ・ウォークの散歩やサンセットが楽しめるディナークルーズがおすすめ。



Island Spa

都会の真ん中にあるオアシス...

JUPITER MAKATI 2/F Jupiter Place 136-138 Jupiter Street Bel-Air, Makati City Tel. 899 1234, 751 8296	RUSTANS MAKATI 5th Level Rustan's, Makati City Tel. 710 8588 www.islandspa.ph	RESORTS WORLD MANILA Unit 1, 5/F Newport Mall, 100 Andrews Ave. Pasay City Tel. 823 1055, 823 3212, Mobile +63(917) 882 1055
--	---	--

指圧/スウェディッシュ/アロマセラピー / ホットストーンマッサージ / パンパー・マッサージ / 伝統的中国式足つぼマッサージ

第14回大阪アジア映画祭コンペティション部門上映作品!

The 14th Osaka Asian Film Festival Competition Division Nominee!

日本から移住してきた

農夫・セタが

少数民族の若い娘、ファサン

と結ばれるが

次第に色濃くなってゆく

セタとファサンの苦悩...

Mr. Tanabata is Middle-aged and lonely, he falls in love with a young feisty Bontoc woman, Fasang. They get married and have a son, but Fasang is attracted to the city lights of Baguio that is now taking shape, and to someone else.

Tanabata's Wife

2018年 | フィリピン Philippines | 81分 minutes

トファームフィルムフェスティバル2018
最優秀作品賞他、9部門受賞。

Won TOFARM FILM FESTIVAL 2018 Best Work Award and 9 other categories.

監督: チョイ・パングリナン, チャールソン・オン, リト・カサヘ 出演: メイ・ファングラヤン, カミラミューキ, カート・アララッグ, ダニロ・ブレイナー
Director: Choy PANGILINAN, Charlson ONG, Lito CASAJE Stars: Miyuki Kamimura, Maribeth Fanglayan, Kurt 'Ayeo-eo' Alalag



Best Picture
Best Actress: Mai Fanglayan
Best Actor: Miyuki Kamimura
Best Director: Charlson Ong,
Lito Casaje and Choy Pangilinan
Best Screenplay: Charlson Ong,
Choy Pangilinan, Mao Talas, Juan Carlo Tarobal
Best Cinematography: Nap Jamir
Best Editing: May-I Padilla
Best Production Design: Martin Masadao
Best Musical Score: Kurt Alalag, May-I Padilla, Marc Tan

トファームフィルムフェスティバルは農業をテーマにしたオリジナル作品がエントリーされる映画祭。脚本募集を経て候補作品にはそれぞれ150万ペソの制作補助金が支払われる。2018年は6作品が候補作として制作され、1930年代にフィリピンで発行された日系人作家シナイ・ハマダの短編小説を原作にした「セタの妻」が最優秀作品賞他、9部門を受賞。TOFARM FILM FESTIVAL is the only advocacy-driven film festival in the country today, with entries showcasing the lives, journeys, trials and triumphs of the Filipino farmer.

(Sat) Jun 22 - (Sun) 23, 2019

Ticket
P200

“セタの妻” 特別上映 "Tanabata's wife" special screening

Screening time

22(Sat) 10:00am / 14:00pm / 17:00pm

23(Sun)

13:00pm / 15:30pm / 17:30pm

お申込み・お問い合わせ Tel: 890-8480 2F Makati Cinema Square, Chino Roces Avenue Brgy. Pio del Pilar Makati City

TIU
THEATER
まにら新聞劇場



MINORI-TEI
JAPANESE RESTAURANT

First Philippine Industrial Park (FPIP) along R.S. Diaz Aveue in Barangay
Sta. Anastacia, Sto. Tomas, Batangas.
Tel: (043) 405-5001 / 0917-521-6797



LA MERE POULARD
1888

Upper Ground, SM Aura Premier, BGC, Taguig City
Tel: 0917-580-0137 / (02) 838-1238